



現代朝鮮語における「???'の補助動詞的用法について

著者	松岡 雄太
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	21
ページ	37-53
発行年	2019-10
その他のタイトル	????? “ ??? ” ? ?????? ??? ???
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017640

現代朝鮮語における「다니다」の 補助動詞的用法について

현대한국어 “다니다”의 보조동사적 용법에 대하여

松岡雄太
마쓰오카 유타

이 논문은 선행연구에서 아직까지 거의 논의하지 않았던 “다니다”의 보조동사 용법에 대해서 살펴보았다. 필자는 보조동사란 본동사와 달리 양상이나 양태와 같은 문법적 의미를 가지게 된 동사 중에서 앞에 오는 동사나 뒤에 이어지는 어미에 사용 제한이 있는 것이라고 주장한 고구라(2018)의 정의에 따라서, 보조동사를 본동사가 접사로 문법화되어 가는 중간적 단계에 있는 것이라고 본다. 이런 관점에서 보면 “다니다”는 보조동사로 인정할 수 있을 것이다. 그 이유는 첫째 “다니다”는 앞에 오는 동사가 접속어미 중에서 “-고”와 “-아/어”로 활용할 때에 쓰이는데, 주로 그것이 타동사인 경우에 “-고”, 자동사인 경우에 “-아/어”가 되며 일부 동사는 “-고”와 “-아/어”를 모두 사용할 수 있기 때문이다. 둘째 “다니다”는 본동사의 어휘적 의미가 보조동사로 쓰일 때에도 사용 제한으로 남아 있기 때문이다. 이런 “다니다”는 다른 보조동사들에 비해 덜 문법화된 것이라고 볼 수가 있고, “가다”나 “오다”와 같은 범주로 들어갈 가능성이 높다.

キーワード

현대한국어, 보조동사, 문법화, “다니다”, 양상

1. 問題提起

朝鮮語의補助動詞に関する研究は、従来特に韓国国内において非常に盛んで、数多くの論文が出されているが、従来の研究の論点は、概ね、以下の(1)に挙げる5点にあったと言える。

- (1) a. 補助動詞(用言)の目録作成
- b. 各補助動詞(用言)における意味・用法の記述と分析
- c. 方言における補助動詞の記述(主にソウル方言に見られない動詞やソウル方言と意味・用法が異なる動詞が中心)

d. 各補助動詞における通時的变化の記述

e. 各補助動詞における他言語との対照

このうち、(1a) に関して言えば、補助用言として認める動詞の一覧が、いまだ研究者間で一致しない。一例として、손세모듈 (1996) が認める補助動詞を挙げると、以下の (2) の通りである¹⁾。

(2) 손세모듈 (1996: 37-69) の補助動詞目録

가다/오다, 있다 (持続)

두다/놓다 (結果持続)

버리다/내다 (終結)

주다 (드리다) (受惠)

대다 (強勢)

보다 (試行)

지다 (変化)

(-고) 싶다 (希望)

また、比較的最近の研究から一例を挙げると、황화상 (2018) は以下の動詞を補助動詞と認めている。

(3) 황화상 (2018: 277-281) の補助動詞目録

(-어) 가다, 오다, 내다, 버리다, 주다(드리다), 두다, 놓다, 가지다, 지다, 대다

(-어, -고, -다(가))보다

(-어, -어야, -었으면, -으려(고)/-고자, -고는/-곤, -게)하다

(-게) 되다

(-지, -고(야))말다

(-고)나다

(-지)아니하다(않다), 못하다

(-고)하다

(-기는/-기도/-기나)하다

(-어, -고)있다(계시다)

このような違いが生じるのは、補助動詞をどのように定義するかが研究者ごとに微妙に異なるためと考えられる。一般的な補助動詞の定義は、次のようなものだろう。

(4) 他の語に付けて、これに付随的な意味を添える補助的に用いられる用言で、これには補助動詞と補助形容詞がある、と言われる。補助用言として考えられているものにはさまざまなものがあり、また、学者によってもいろいろ意見を異にしている。

…（中略）…… 本来の動詞の意味を失って、アスペクトや法（mood）を示すようになっているものは、もはや2つの動詞の合成の域を出ているので、補助動詞として扱うのが適当である。（亀井他 1996: 1308）

(4) は本来、本動詞であったものが、アスペクトやモダリティといった文法的な意味を担うようになったものを補助動詞と呼んでいる。この認識は共有されていると思われる。朝鮮語の場合、このように補助動詞を広く定義して、前項動詞の活用が接続形（-아/어, -고）でも名詞形（-기, -지）でも副詞形（-게）でも、これらに後続する後項動詞が文法的意味を担っていると判断したとき、これを補助動詞とみなす立場に立てば（3）のようになり²⁾、狭く定義して、例えば、前項動詞の活用を接続形（-아/어, -고）に限定する立場に立てば（2）のようになるだろう。

2. 補助動詞の定義

2.1. 先行研究の定義

だが、従来、朝鮮語における補助動詞の定義は、細部に亘ってみるとさまざまであった。このように研究者ごとに定義が異なるのは、朝鮮語の場合、前項動詞が接続形「-아/어」をとると、複合動詞と補助動詞の区別が難しくなる点が主な理由として挙げられる。すなわち、先行研究が補助動詞を細かく定義しているのは、補助動詞と複合動詞の区別基準を見いだすためである。以下に一例を挙げる。

(5) 손세모돌（1996: 37-69）における補助動詞の設定根拠と複合動詞との区別基準

〈設定根拠〉

- ① 構文論的依存性（単独で述語機能を担わない。先行動詞を省略できない）
- ② 代用形による非置換性（代用形の「그리다」に置き換えられない。先行動詞は置き換えられる）
- ③ 際立った文法性（アスペクトやモダリティなどの意味をもつ）

〈複合語の後行動詞との区別基準〉

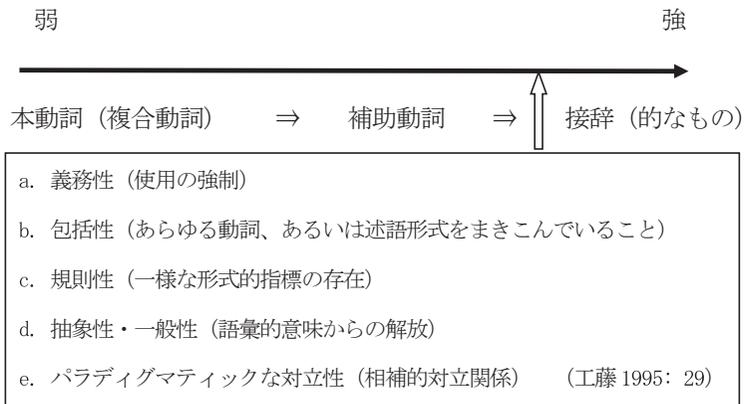
- ① 項との無関性（補助動詞は文の項数に関わらない。先行動詞が決定する）
- ② 内的非分離性（補助動詞と先行動詞の間に独立した別の成分が介入できない）
- ③ 文の代用形との直接結合可能性（代用形の先行動詞に後続できる）

- ④ 先行動詞までの分離代用 (先行動詞のみ代用形にできる)
 - ⑤ 同一形態の先行動詞使用可能性 (補助動詞は同語反復ができる)
 - ⑥ 連続使用可能性 (補助動詞は四つを上限に連続できる)
 - ⑦ 意志分裂文 (pseudo-cleft) の形成可能性 (補助動詞は意志分裂文にできる)
- (6) 김영태 (1997: 21) における補助用言の確認基準
- ① 補助用言は本用言の述語機能を補助する。
 - ② 補助用言の意味はその語彙が持つ固有の意味が弱化するか別の意味で現れる。
 - ③ 補助用言は必ず本用言の特殊語尾と共起する。
 - ④ 補助用言は本用言を省略して単独で用言として使われない。
 - ⑤ 先行する本動詞は代用言が可能であるが、補助動詞は不可能である。
 - ⑥ 本用言と補助用言の間には制約的に別の文法成分が介入される。
 - ⑦ 補助用言の活用はその先行語尾によって活用に制約を受ける。

上に挙げた (5) と (6) のような定義や基準は、2000 年以降も研究者ごとに多少の表現の違いや基準の取捨選択こそあれ、概ね踏襲されている。

2.2. 本論文の定義

前節で見た先行研究による定義に対し、筆者は補助動詞とはそもそもなぜ存在するのか、という観点からの定義を試みる。本動詞が文法的な意味を担うようになった場合、これは何らかの理由によって、当該の動詞が文法化した結果と考えられる。しかし、語彙要素 (内容語) は一足飛びに文法要素 (機能語) に変化するわけではない。その間にはいくつかの中間的な段階がある³⁾。そして最終的に、その動詞が「完全に」文法化したかどうかを判断する基準は、工藤 (1995: 29) が述べる 5 つの基準を満たす必要があると考える。



【図 1】 補助動詞の文法化とその程度

本論文では、補助動詞は本動詞が文法化していく途上 (中間段階) にあるものと位置づけ、シベ語の補助動詞を扱った兎倉 (2018) に従って、補助動詞を次のように定義する。

(7) 兎倉 (2018: 29-31) による補助動詞の定義

語彙的な意味を表す本動詞に後続して、アスペクトやモダリティを表す動詞

以下の点において動詞連続と区別される

①前に現れる要素の制限

通常の動詞連続では、前に現れる要素は -me, -maqe, -fe' という副動詞接辞を自由にとることが可能であるが、補助動詞の前に現れる動詞の形式には制限がある。

②自身の活用の制限

通常の動詞連続では、後部の要素がとる形式に制限はないが、補助動詞とする動詞には否定形や進行形をとることができない等、形式の制限が見られる。 (下線は筆者による)

つまり、文法化の途上であるがゆえに、その前後に来る要素に制限が見られるものを、補助動詞と認めるのである⁴⁾。逆に言えば、このような制限がない場合、それはまだ文法化していない本動詞かあるいは既に完全に文法化した接辞ということになる。この定義に従った場合、例えば、황화상 (2018) の目録にはあるが손세모돌 (1996) の目録にはなかった「나다」や、손세모돌 (1996) の目録にも황화상 (2018) の目録にもなかった「있다」なども補助動詞と認められることになる。

(8) A: 희선아, 빨리 와!

〈ヒソン、早く来いよ!〉

B: 잠깐만. *곧 먹고 날 거야.

〈ちょっと待って。もうすぐ食べ終わるよ〉

(8) の下線部は非文であり、「다 먹어」または「다 먹어 가」のように言う必要がある。「-고 나다」は主節では用いられないという強い制限があり(먹고 났다, 먹고 날까?, 먹고 날래, 먹고 나고 싶다, 먹고 나는군요, 먹고 나네요, 먹고 납니다, 먹고 나요などは全て非文)、먹고 나서 (도/야), 먹고 나더니, 먹고 나면, 먹고 나자 (마자), 먹고 났을 때, 먹고 난 뒤 (에), 먹고 난 후 (에) のように、一部の従属節の中でしか用いることができない。

(9) 소설을 쓰고 {않았네/*않네}. (소설 99)

〈小説を書いてるんだ (皮肉・嫌味)〉

(9) は「-고 않다」の例であるが、通常「-고 않다」は後ろを過去テンスにしなければならぬという強い制限がある⁵⁾。

一方で、前に来る前項動詞の活用を見た場合、「-고」と「-아/어」に限って見ると、「-고」しか言えないもの、「-아/어」しか言えないもの、両方が言えるものがある。

(10) 「-고」と「-아/어」の対立

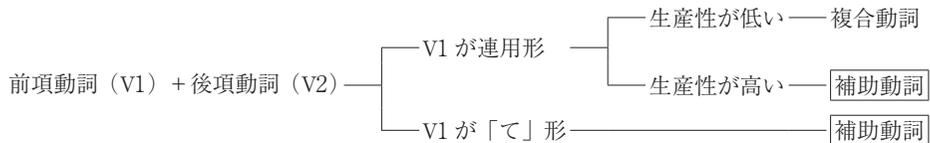
-고 있다	-아/어 있다 (部分的)
-고 가다	-아/어 가다
-고 오다	-아/어 오다
-고 말다	*-아/어 말다
*-고 버리다	-아/어 버리다
*-고 대다	-아/어 대다
*-고 두다/놓다	-아/어 두다/놓다
*-고 지다	-아/어 지다

本論文の定義に従うと、「-고」か「-아/어」のどちらかしか許容しないもの、また許容しても共起する動詞に制限があるものも、補助動詞として認めることになる。このように補助動詞を定義した場合、最後に問題として残るのは、「-아/어」を取るもののうち、それが複合動詞なのか補助動詞なのかを区別することである。この点に関しては、次のように考える。

(11) 動詞と動詞が結びつく形式には、二通りある。「て」の形に続くものと、… (中略) …、動詞の連用形に続くものである。… (中略) …、「て」の形に続く動詞類は、通常、その形式度の高さから「補助動詞」と呼ばれている。連用形に続く動詞類は、複合動詞の「後

項動詞」と呼ばれることが多い。その中で多くの動詞につく生産性の高いもの（造語力の強いもの、すなわち多くの語につき、複合動詞を作りだしていくもの）を特に「補助動詞」と言うこともあるが、「て」の形に続くものとは働きが異なるので、はっきり区別したほうがよいと思われる。…（中略）…、補助動詞の類は、数は少ないが、多くの動詞に接続し、生産性が高い。本来の語彙の意味が薄れ、文法形式として確立していることが分かる。（姫野 2018: 5-7）

(11) は日本語の複合動詞と補助動詞の違いについて述べたものであるが、これを朝鮮語に置き換えてみると、連用形と言っているものが「-아/어」、 「て」形と言っているものが「-고」と考えることができる⁶⁾。(11) を整理すると下のようになるが、「-아/어」を取るものの中で、生産性が高いものもまた「補助動詞」となる。



【図 2】複合動詞と補助動詞の区分

3. 「다니다」の補助動詞的用法

上のように定義した場合、本論文で扱う「다니다」は、内山（1997: 82）が指摘するようにアスペクティブな意味を表しており、多分に補助動詞的な側面がある。

(12) 「方向」をあらわす用言 2 には다니다 《行き来する》がある。これは特定の方向をあらわしているとはいいいにくく、あえていうなら「不定」の方向とでもよぶべきものだろう。

〈用言 1 + 用言 2〉全体が「動作の反復」の意味をあらわすとかがえられる。

(13) 다른 놈들은 활발하게 식당 손님들의 발 밑을 기어다니고 뛰어다니는데 온몸이 하얀 고양이 한 마리만….

〈他のやつらは元気よく食堂のお客さんの足元を這い回り飛び回るのにからだじゅう白い猫 1 匹だけ…〉（内山 1997: 82 の例文（110））

だが、従来、補助動詞の目録に「다니다」を入れている研究は管見の限り一つもない。つまり、「다니다」は本動詞としての用法のみあると考えているか、複合動詞の一部に過ぎないと考えている、のどちらかだと言える。恐らく朝鮮語母語話者の直感として、補助動詞的に用いら

れている「다니다」に文法的な意味を認められないのだろう。

「다니다」を複合動詞と見なすとすれば、語によっては辞書の見出し語に記載されていることを予測する。韓国、北朝鮮、日本で出版された、いくつかの中型・大型辞書を対象に、今回、筆者が収集した補助動詞的に使われている「-아/어 다니다」の例が見出し語として載っているかどうかを調べた結果が【表1】である。

	見出し語	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1	걸어다니다	×	×	×	○	○	○	×	○
2	굴러다니다	○	○	○	○	○	○	×	○
3	날아다니다	○	○	○	○	○	○	×	○
4	돌아다니다	○	○	○	○	○	○	○	○
5	따라다니다	○	○	○	○	×	○	○	○
6	떠다니다	○	○	○	○	○	○	○	○
7	떠돌아다니다	○	×	○	×	○	○	○	○
8	뛰어다니다	○	×	○	×	×	○	×	○
9	물려다니다	○	○	○	○	○	×	○	○
10	붙어다니다	×	×	×	×	○	○	×	×
11	어울려다니다	×	×	×	×	×	×	×	×
12	옮겨다니다	×	×	×	○	×	×	×	×
13	쫓아다니다	○	○	○	○	×	○	×	○
14	찾아다니다	○	×	×	○	○	○	×	○
15	흘러다니다	×	×	×	×	×	○	×	×
	○の数の合計	10	7	9	10	9	12	5	11

【表1】各辞書における「-아/어 다니다」の見出し語の有無

- ①『표준국어대사전』 ②『우리말 큰사전』 ③『국어대사전』 ④『연세한국어사전』
 ⑤『현대조선말사전』 ⑥『조선말대사전』 ⑦『朝鮮語大辞典』 ⑧『朝鮮語辞典』

【表1】から分かることは、辞書によって見出し語として載せているかどうかの判断が一つとして同じでない、ということである。これは従来「다니다」がまともに議論の対象にならなかったことを裏づけている。いずれにせよ、多かれ少なかれ「-아/어 다니다」の用例が見出し語に載っているということは、上の辞書がこれらの「-아/어 다니다」を複合動詞として認めていると考えてよいだろう。

一方で、【表1】に挙げた辞書のうち、④、⑦、⑧の「다니다」の項の中には、次のような記述も見られる。

(14)『延世韓国語辞典』の「다니다」の項目

- ③ [主に '-고/며 다니다' の形で使われ] 行ったり来たりする

이틀날부터 그는 절룩거리며 다닌다.

〈翌日から彼は足をひきずりながら歩く〉

그는 얼굴을 바짝 쳐들고 마을 사람들 앞을 활개치고 다녔다.

〈彼は顔をぐっと上げて村人たちの前を我が物顔で歩いた〉

(연세대학교 언어정보개발연구원 편 1998: 431、下線と日本語訳は筆者による)

(15) 『朝鮮語大辞典』の「다니다」の項目

- ② (あちこち)歩き回る, 行ったり来たりする (왔다 갔다 하다), (動詞の連用形に続いて)
…し回る, …し歩く

복돌이는 새 옷을 떨뜨리고 다닌다.

〈ボクトリは新しい服を見せびらかしながら歩き回っている〉

옥분이는 뒷동산에서 뛰어다니며 놀던 어린 시절의 추억에 잠겼다.

〈オクブニは裏山で走り回って遊んだ幼いころの思い出にひたっていた〉

그녀는 머리에 기름도 바르고, 남이 알듯 모를듯 얼굴에 분도 칠하고 다녔다.

〈彼女は髪に油もつけ, 顔には人がわかるかわからないかぐらいのおしろいも塗って歩き回っていた〉 (大阪外国語大学朝鮮語研究室 1986: 544、下線は筆者による)

(16) 『朝鮮語辞典』の「다니다」の項目

◆ -고 다니다

- ① … (し) て通う 버스를 타고 다닌다. 〈バスに乗って通う〉

- ② … (し) て回る 부모의 말은 안 듣고 못된 짓만 하고 다닌다.

〈親の言うことは聞かないで悪いことばかりして回る〉

(油谷ほか編 1993: 434、下線は筆者による)

(14)~(16)の記述から分かるのは、「다니다」に補助動詞的な用法があることを認めつつも、前項動詞の活用に「-고」のみを認めたり、「-고」と「-며」を認めたり、「-고」と「-아/어」を認めたり、と一致していないことである。このこともまた「다니다」の補助動詞的用法が十分に議論されてこなかったことを示唆している。以下、前項動詞の活用が「-고」の場合と「-아/어」の場合を対象に、「다니다」が補助動詞として認められることを論じる。

3.1. 前項動詞の制限

まず、補助動詞的に用いられる「다니다」は使用に制限がある。このような制限があることは、上記の定義に照らし合わせたとき、「다니다」が補助動詞であることを意味すると言える。筆者が今回収集した用例はそれほど多くはないが⁷⁾、その用例を前項動詞の活用ごとに分類すると以下の(17)、(18)の通りである。

(17) 「-고 다니다」を取る動詞 (64 例) [太字は自動詞]

가지다 (밤125), **꺾다** (과도45), 끝다 (밤193), 내놓다 (사월150), 넣어두다 (이상 284), 달다 (과도72, 사랑50), 데리다 (누구96), 두들기다 (밤113), 들다 (과도76 他 11 例), **떠들다** (사랑83), **떠들어대다** (밤281), 뜯다 (밤202), 모으다 (누구331), 묻다 (누구288), 물어보다 (누구96), 보다 (사월168, 사월277), 붙이다 (누구134), 비집다 (사월59), 수 소문하다 (누구345), 신다 (누구231), 신다 (누구55), 외우다 (이상185), 읊조리다 (누구180), 일삼다 (사월193), 입다 (과도207, 사월150, 누구90), 자랑하다 (사월75), 줍다 (과도73), 지나다 (사랑61, 사월164, 밤281), 지르다 (사월197, 사월200), 짓다 (사월73, 밤83), 차다 (사월17), 찾다 (과도75), 체포하다 (밤284), 치다 (누구248), 타다 (밤157, 누구27, 누구145), 하다 (과도269, 밤100), **헤매다** (누구122), 활개치다 (이상172), **활보 하다** (이상90), 흔들다 (사월58)

(18) 「-아/어 다니다」を取る動詞 (126 例)⁸⁾[太字は他動詞]

견다 (과도73 他 37 例), 구르다 (과도45 他 3 例), 끌리다 (사랑75), 날다 (과도192 他 7 例), 돌다 (과도231 他 10 例), **따르다** (과도132 他 5 例), 떠돌다 (이상23 他 5 例), 뛰다 (과도210 他 10 例), 뜨다 (과도73 他 13 例), 물리다 (과도71 他 3 例), 붙다 (사월122, 사월 193), 어울리다 (밤13, 누구155), 옮기다 (이상225), **쫓다** (사랑51 他 8 例), **찾다** (과도 75 他 6 例), 흐르다 (사월217)

(17)、(18) からは「-고 다니다」が主に他動詞と、逆に「-아/어 다니다」が主に自動詞と結びついていることが分かる。(17) のうち、辞書の分類上、自動詞になっているものの用例を以下に示す。

(19) a. 최도식은 그 소문을 떠들어대고 다녔다. 두 사람은 서로 만나지 않았다. 이제 더 이상 누구도 웃지 않았다. 평우동맹이 모임을 갖던 동산교회 전도실은 늘 비어 있었다. 그해 봄, 우연히 최도식을 만났을 때, 박도만은 한 번만 더 안세훈과 정희 일을 떠들어대고 다니면 죽여버리겠다고 경고했다. (밤281)

〈チェ・ドシクはその噂を騒ぎ立てて回った。二人はお互い会わなかった。もうこれ以上、誰も笑わなかった。萍友同盟が集会を持った東山教会の伝導室はいつもがらんどうだった。その年の春、偶然チェ・ドシクに会ったとき、パク・トマンはあと一回 アン・セフンとジョンヒのことを騒ぎ立てて回ったら殺すぞと警告した〉

b. 그렇게 골목들을 헤매고 다니던 어느 날이었다. (누구122)

〈そうやって路地をさまよっていたある日のことだった〉

c. 이 위대한 작가는 실제로 육십여 년 전 서울 거리를 활보하고 다녔다. (이상90)

〈この偉大な作家は実際六十年余り前、ソウルの通りを闊歩して回った〉

- d. 씨발 놈야, 너는 그래서 만날 돈만 모이면 남조선 뜨겠다고 떠들고 다니냐? 이 위선적인 새끼야! (사랑83)
〈くそつたれ、お前はそれでいっつも金さえ貯まったら南朝鮮離れようって騒ぎまわってんのか? この偽善野郎が!〉
- e. 돈이 없어서 며칠 동안 굶고 다닌 사람에게는 길에 굴러다니는 동전 한 닢도 너무나 중요하다. (과도45)
〈お金がなくて数日間飢えていた人にとっては、道に転がっている小銭一枚でもありがたい〉

(19) を見ると分かるように、自動詞と記述される動詞であっても、実際の用例を見てみると、(a)~(c) は文中に対格助詞が現れているので、他動性が強いと考えられる。こうして見ると、今回の用例において「-고 다니다」が純粹な自動詞と結びついた例は (19d) と (19e) の2例のみである⁹⁾。以上のことは以下の用例からも指示される。(20) は「-고 다니다」が他動詞と結合し、自動詞と結合しにくいことを意味している¹⁰⁾。

- (20) a. 회선이가 학교에 와서 감기를 {웁기고/*웁겨} 다녔으니까 다들 감기에 걸려 버렸다.
〈ヒソンが学校に来て風邪をうつして回ったから、みんな風邪を引いてしまった〉
- b. 한국에 놀러 가서 맨날같이 밤늦게 술을 {마시고/*마셔} 다녔다.
〈韓国に遊びに行つて毎日のように夜遅くまで酒を飲んで回つた〉
- c. 우리 애는 지난주에 사준 윈피스를 맨날 {입고/*입어} 다닌다.
〈うちの子は先週買つてやつたワンピースを毎日着て回つている〉
- d. 그 사람은 선거포스터를 동네 게시판에 {붙이고/*붙여} 다녔다.
〈その人は選挙ポスターを町の掲示板に貼つて回つた〉

次に、「-아/어 다니다」が他動詞と結合する場合であるが、これは実際に「-고 다니다」と置き換えが可能である。以下の(21)からも分かるように、両者の間に意味的な違いはほぼない。

- (21) 그리고 그해 여름, 나는 오리건의 해변들을 순례하며 운동화를 찾아다녔는데, 그 일을 저를 구원했습니다. 어쨌든 그 여름 내내 내가 찾고 다녔던 건 운동화가 아니라 지난 꿈의 잔해들일지도 모르지만요. (과도75)
〈そしてその年の夏、私はオレゴン海岸を巡礼しながら、スニーカーを探してまわったんですが、このことが私を救ってくれたんです。ともすればその夏じゅう、私が探しまわってたのはスニーカーじゃなくて、過ぎ去りし夢の残骸だったのかもしれませんが〉

両者の置き換えが可能なのは、「쫓다」や「따르다」の場合も同様である。ただし言語コンサルタントによると (22b) の「따르고 다니다」は「その教授が指導教員のような感じ」がするのに対して、「따라다니다」は「その教授の後ろをついて回っているような感じ」がするという。

(22) a. 늑대가 양떼를 {쫓고/쫓아} 다녔다.¹¹⁾

〈狼が羊の群れを追いかけて回った〉

b. 그 교수를 {따르고/따라} 다니는 사람

〈その教授について回る人〉

3. 2. 本動詞の語彙的意味の残存

3.1 で見たように、前項動詞の活用に制限があるのに加え、「다니다」には本動詞としての語彙的意味が残存していることが理由と考えられる使用制限もある。

(23) a. 여름방학 내내 극장에서 영화를 보고 다녔다.

〈夏休み中、映画館で映画を見て回った〉

b. ??여름방학 내내 집에서 DVD를 보고 다녔다.

〈夏休み中、家でDVDを見て回った〉

(23a) は問題ないが、通常家の中で DVD を置いてある場所は何カ所もないので、語用論的な理由から、(23b) は言いにくくなる。このことは本動詞の「다니다」が移動を伴う動作であり、その語彙的意味が補助動詞的な用法に残存していることを意味する¹²⁾。

(24) a. 졸업한 학교를 오랜만에 {찾고/찾아} 다녔다.

〈卒業した学校を久しぶりに訪ねて回った〉

b. 졸업한 대학교를 오랜만에 {??찾고/??찾아} 다녔다.

〈卒業した大学を久しぶりに訪ねて回った〉

(25) a. 운동장을 뛰어 다녔다.

〈運動場を走り回った〉

b. *운동장을 세 바퀴 뛰어 다녔다.

〈運動場を三周走り回った〉

(24a) は問題なく可能である。卒業した学校、つまり小学校、中学校、高校などを順に尋ねたという解釈である。しかし、(24b) は大学に限定すると通常一カ所で、しかも自分が卒業し

た大学となると場所も知っているはずだから、語用論的な理由から言いにくくなる。同様に、(25a) は問題ないが、(25b) は非文である。(25b) が非文になるのは、「다니다」が本来非限界的動作であるため、限界的動作（状況）下で用いられないものとする。以上のことは、内山（1997: 82）が、「다니다」が「不定」の方向を表すと述べていたことと符合する。

(26) a. 센 바람이 {*불고/*불어} 다녔다.

〈強風が吹き回った〉

b. 봄이 돼 따뜻해지자 얼음이 {*녹고/*녹아} 다녔다.

〈春になり、暖かくなるや、氷が溶け回った〉

(26) が言えないのは、ともに無生物主語であり、意図的な動作でないことが挙げられる。(26) が非文になるのも、本動詞としての語彙の意味が残存していることが理由として挙げられるが、この点に関しては、(27) に見るように、文学作品の中では実際に、無生物主語かつ無意図的な動作においても「다니다」が使われている用例が見つかったので、この制限は徐々に緩和されつつあるのかもしれない。

(27) 그때쯤에는 그도 책을 덮고 봄날의 정경을 바라보며 나른하게 앉아 있었다. 몸이 처지자, 생각은 제멋대로 흘러다녔다. 영범은 뒷좌석에 굴러다니던 『늦여름』을 바라보던 아버지의 모습을 떠올렸다. (사월217)

〈そのころには彼も本を閉じ、春の日の情景を眺めながら気だるく座っていた。身体が沈むと、思考は勝手気ままにさすらった。ヨンボムは後ろ座席に転がっていた『夏の終わり』を見つめていた父の姿を思い浮かべた〉

4. 結論

本論文では、「動作の反復」というアスペクト的意味を表す「다니다」の補助動詞的な用法に、使用制限があることを見てきた。この「다니다」が補助動詞としてどのくらい文法化しているのか、を考えたとき、同語反復が可能かどうかの一つの基準になる。本動詞と同じ語を重ねて使用することができるものは、文法化の進んだ補助動詞と考えることができよう。このような点から見たとき、「다니다」は(28)に示すように、同語反復を許さない。

(28) 우리 아버지는 젊으셨을 때 집에 오는 길에 역전 술집에 자주 {*다니고/*다녀} 다녔다.

〈私の父は若いとき、帰宅途中に、駅前の居酒屋によく通い回った〉

また、「다니다」の後ろに続く活用を見ると、特に制限は見られない。このことから総合して考えると、「다니다」は他の補助動詞に比べ、文法化がほとんど進んでいない初期段階にあると考えられる。

最後に、補助動詞としての「다니다」のシンタグマティックな構造はどうなっているのか、換言すれば、どのパラダイムに属し、他のどの要素と対立するのか、について考察してみたい¹³⁾。(2)で挙げた손세모듈(1996)や(3)で挙げた황화상(2018)を見ると分かるように、従来の研究は意味に基づいて補助動詞を分類している。例えば、(2)と(3)では、「가다」、「오다」、「있다」が同じ範疇に属しているが、「가고 있다」、「와 있다」のように言えることから、上で挙げた工藤(1995)が提案する文法範疇の定義に基づく、「가다」、「오다」と「있다」を同列で扱うのは問題がある。一方で、「가다」と「오다」は「가오다」、「와가다」のように言えないことから、同じ範疇に属すると見てよいだろう¹⁴⁾。

(29) a. 여름 방학 내내 매일 도서관에서 “잃어버린 시간을 찾아서” 를 읽어내대고 다니고 있었다.

〈夏休み中毎日図書館で『失われた時を求めて』を読み切りまくり回っていた〉

b. 도서관에서 책을 읽어내대고 다니고 나서……

〈図書館で本を読み切りまくってまわってから……〉

c. 희선이는 주말마다 오락실에 {*가고/*가} 다녔다.

〈ヒソンは毎週末ゲームセンターに行き回った〉

(29)の(a)と(b)から「다니다」は少なくとも「내다」、「대다」、「있다」、「나다」などとは異なる範疇に属することが分かる。これに対して、(29c)から分かるように「다니다」は「가다」とシンタグマティックに共起できない。これに加えて、前項動詞が「-고」と「-아/어」の両方を取り、その共起関係が類似することからも、「다니다」は「가다」、「오다」と同じ範疇に属する可能性が高いと考える¹⁵⁾。朝鮮語の補助動詞は今後このようにシンタグマティックな関係を見ながら、パラダイグマティックな対立性を考慮して、その体系を記述する必要があると考えるが¹⁶⁾、補助動詞全体から見た「다니다」の位置づけについては今後の課題としたい。

注

1) 손세모듈(1996)以前の研究における補助動詞の目録は、손세모듈(1996)及び박선옥(2005: 91-93)などで整理して紹介されている。

2) 本動詞の後ろが名詞形や副詞形になっているもののみを補助動詞と認める研究者は、管見の限り一人もいない。かならず、接続形になっているものを補助動詞の目録に入れている点は、みな共通して

いる。

3) このような考え方自体、特に真新しいものではない。本論文と同様、補助動詞を本動詞が接辞化する途上にあるものと捉えた研究に김미영 (1998)、이현희 (2009) などがある。だが、これら先行研究における補助動詞の定義は本論文とは異なる。

4) 兪倉 (2018) はこの①・②に挙げる基準の他に、「同語反復」も補助動詞の定義に挙げている。「一般的な動詞連続では、〈A+B〉という構造においてAとBが同一の動詞になることはないが、本書で補助動詞とみなすものはAとBが同一の動詞となり、〈A+A〉という構造をとることができる(A+A構造の場合は前の動詞を本動詞、後ろの動詞を補助動詞と考える)。」

確かに同語反復が可能であることは、その動詞が本動詞や複合動詞として使われていないことの証左であろう。だが、筆者は同語反復を補助動詞の定義自体に用いるのではなく、補助動詞の中でも、文法化が進んでいるかどうかの基準として用いたい。すなわち、同語反復が可能であれば、文法化がより進んでいると考え、不可能であれば、文法化がまだあまり進んでいないと考える。

5) 言語コンサルタントによると、現在テンスの場合、「소설을 쓰고 앉아 있네」のように「-아/어 있다」なら可能だと言うが、これは歴史的に「-아/어 있다」が「-았/었다」に変化したことと関係があるのだろう。

6) 厳密に言えば、テ形と「-고」、連用形と「아/어」が完全に一致するわけではない。この点に関しては、塚本 (2004)、和田 (2011a, b)などを参照のこと。

7) 今後は必要に応じて、例えば『21세기 세종계획 최종 성과물』などのコーパスを用い、より多くの用例を収集する必要があるだろう。

8) (18)に挙げた他にも内山 (1997: 82) は以下のような例を収集している。

건너다니다 〈渡り歩く〉、날려다니다 〈飛ばされる〉、 옮겨다니다 〈移り歩く〉、 움직여다니다 〈動き回る〉、 잡아다니다 〈掴んで回る〉、 지나다니다 〈行き来する〉、 쫓겨다니다 〈追われ回る〉

9) このうち、(19e)は言語コンサルタントによるとやや違和感のある表現であるという。

10) この傾向を覆すほどではないが、やや予測に逸脱する結果も観察されている。

(1) 늑대가 양떼를 {물고/*물어} 다녔다.

〈狼が羊の群れを追いかけて回った〉

(2) 어제 우리집 양떼가 늑대에게 {물리고/*물려} 다녔는데 한 마리 죽었다.

〈昨日我が家の羊の群れが狼に追いかけて回られたのだが、一匹が死んだ〉

(3) 할로윈 파티 때문에 독일어 전공 학생들이 교실마다 {*물리고/물려} 다녔다.

〈ハロウィンパーティーのため、ドイツ語専攻の学生達が各教室を押し寄せて回った〉

(1)を受け身にして自動詞化した(2)は「-아/어 다니다」を予測するが、1名の言語コンサルタントによると「-고 다니다」になり、同じような用例でも(3)は「-아/어 다니다」を取り、「-고 다니다」を許容しないという。この点についてはコンサルタントの間でも揺れがある。

11) (22a)を受け身にしたものが下の(4)である。これは注10の(2)で挙げた例とほぼ同じ状況であるが、「물려 다니다」が言えずに「쫓겨 다니다」が言えるのはなぜか分からない。

(4) 어제 우리집 양떼가 늑대에게 {쫓기고/쫓겨} 다녀서 한 마리 죽었다.

〈昨日、我が家の羊の群れが狼に追いかけて回されて一匹が死んだ〉

また、(22a)とほぼ同じような状況に見える下の(5)は、言語コンサルタントによると「-고 다니다」がやや不自然に感じるといふ。

(5) 우리 아이는 고양이를 {?쫓고/쫓아} 다니는 걸 좋아한다.

〈うちの子は猫を追いかけてるのが好きだ〉

12) 「移動」の有無という観点から見たとき、以下の例は興味深い。

(6) 나는 그 단어 뜻을 알지 못해 인터넷 사전을 찾아다녔다.

〈私はその単語の意味が分からずにインターネット辞書を調べて回った〉

主語の「私」はパソコンの前に座っているだけで実際は移動していないのだが、インターネットでのサイトの移動も移動の一種とみなされている。これは比喩と考えてよいだろうが、このような例が今後「다니다」の「反復」的意味を幅広く適用していくきっかけになる可能性はある。

13) 内山 (1997: 87) はこのような合成用言間の共起関係を調べているが、なぜか「다니다」だけは議論の対象から除いている。

14) 「오가다」は前項動詞の「오다」が語幹形であることから、複合動詞とするのが適当である。

15) 内山 (1997: 82) には本論文と同じ主張を示唆する記述がある。

「次に가다《行く》および오다《来る》とのパラディグマティックな対立が用例で確認できた例をみる。対立する가다《行く》と오다《来る》가잡아다니다《掴んで歩く》以外すべて「同時」に属するのは興味深い」

また、金秀美 (2013) は「-고 오다」と「-아/어 오다」の違いについて論じているが、「오다」に見られる前項動詞の結合傾向などは「다니다」と通じる部分がある。

16) このような観点からの研究に김천학 (2007) がある。김천학 (2007) は部分的ではあるが、「놓다」、「가다」、「버리다」、「있다」のシンタグマティックな関係性について論じている。

参考文献

[日本語で書かれたもの]

李廷玉 (2010) 「補助動詞構文の文法化の初期段階の設定について」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』46: 55-61.

内山政春 (1997) 「現代朝鮮語における合成用言について—〈用言第Ⅲ語基+用言〉の分析—」『朝鮮学報』165: (39)-(114)

金秀美 (2013) 「韓国語の「고 오다」と「아 오다」について」『慶應義塾外国語教育研究』10: 23-42.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』、東京：ひつじ書房

児倉徳和 (2018) 『シベ語のモダリティの研究』、東京：勉誠出版

塚本秀樹 (2004) 「文法体系における動詞連用形の位置づけ：日本語と韓国語の対照研究」『対照言語学の新展開』、東京：ひつじ書房

姫野昌子 (2018) 『新版 複合動詞の構造と意味用法』、東京：研究社

和田学 (2011a) 「二つの語彙的緊密性—韓国語 (と日本語) の複合動詞—」『山口大学文学会志』61: 83-104

和田学 (2011b) 「韓国語の語彙的複合動詞」『九州大学言語学論集』32: 249-266

[朝鮮語で書かれたもの]

고영근·구본관 (2018) “개정관 우리말 문법론”, 김문당

김명희 (1996) ‘문법학의 틀에서 보는 보조동사구문’, “담화와 인지” 2: 129-146.

김미영 (1998) “국어 용언의 접어화”, 한국문화사

김영태 (1997) “현대국어 보조용언 연구”, 문창사

김진호 (2010) “개정관 외국어로서의 한국어학개론”, 박이정

- 김천학 (2007) '보조동사의 연속과 상', "한국어학" 37: 261-276.
박선옥 (2001) '국어 보조동사의 통사적 특성 연구', "어문론집" 29: 125-151.
박선옥 (2005) "국어 보조동사의 통사와 의미 연구", 역락
손세모달 (1996) "국어 보조용언의 연구", 한국문화사
이현희 (2009) '보조용언의 범주 분화와 접미사로의 이동', "국어학" 54: 165-196.
이호승 (2001) '국어의 상 체계와 보조용언의 상적 의미' "국어학" 38: 209-239.
황경수 (2009) "한국어 교육을 위한 한국어학", 청운
황화상 (2018) "현대국어 형태론 (개정2판)", 지식과교양

[辭書類]

- 大阪外国語大学朝鮮語研究室 [編] (1986) 『朝鮮語大辭典』、角川書店
龜井孝・河野六郎・千野栄一 [編著] (1996) 『言語学大辭典 第6卷 術語編』、三省堂
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 [編] (1988) 『朝鮮語辭典』、小学館
국립국어연구원 [편] (1999) "표준국어대사전", 두산동아
사회과학원 언어학연구소 [편] (1981) "현대조선말사전", 과학·백과사전출판사
사회과학원 언어학연구소 [편] (1992) "조선말대사전", 사회과학출판사
연세대학교 언어정보개발연구원 [편] (1998) "연세한국어사전", 두산동아
이희중 [편] (1983) "국어대사전", 민중서림
한글학회 [편] (1994) "우리말 큰사전", 어문각

[用例収集資料] (【 】内は本文引用時の略号)

- 김연수 (2001) "끝빠이, 이상", 문학동네 【이상】
김연수 (2007) "네가 누구든 얼마나 외롭든", 문학동네 【누구】
김연수 (2013) "사원의 미, 칠월의 술", 문학동네 【사월】
김연수 (2014) "소설가의 일", 문학동네 【소설】
김연수 (2015) "과도가 바다의 일이라면", 문학동네 【과도】
김연수 (2015) "사랑이라니, 선영아", 문학동네 【사랑】
김연수 (2016) "밤은 노래하다", 문학동네 【밤】

謝辭

本論文の作成にあたって調査に協力して下さった朝鮮語母語話者に感謝する。なお、本研究は JSPS 科研費 17K13453 の助成を受けて行われている。

